

---

# ボスの秘密

高林桜花

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ボスの秘密

### 【Zコード】

N4784M

### 【作者名】

高林桜花

【あらすじ】  
ザンザス×スクアーロのお話です。

入りたいって言つたら入りたいんだ！（前書き）

ザンザス×スクアーロのお話です。  
ボスのキャラが・・・。

入りたいって言つたら入りたいんだ！

・・・玄関で喧嘩してゐる奴がいる（泣）

それは・・・

「またあの二人かよ～」

「しようがないよ。もう日常茶飯事になつてゐるもん。」

ザンザスとスクアーロ  
だつた。

「ウ、オオオイ！ボスじゃまだああ！」

「俺の家だから、何をしてもいいだろ？」

ザンザスは、部屋から椅子を持ち出し、玄関先でスクアーロが入れ  
ないように、  
たちふさいでいたのだつた。

「そんなに俺の部屋に入りたいのか？」

「つたりめえだあ！！」

何があるかは分からないが、スクアーロはザンザスの部屋に入りた  
がつていた。

「…そんなに、入りたいのか？…屑」

ザンザスは、睨んでそう言つた。自分の部屋に入れられるのが、よつ

ほど嫌らしい。

だが、スクアーロは、豪快な笑いをして、  
「何かみてはいけない物でもあんのかよ？…坊ちやまよお」  
と、嫌み混じりにザンザスに言った。言った自分が、今でも吹き出  
しそうだった。

## 計画（前書き）

リアルにお部屋が気になります。

## 計画

「ハツ・・・俺の私物がカス」ときに見せられるか。」

「！」

言い訳ができなかつた。

ボスから見たらカスだし、私物なら・・・

「見せてもかまわんが・・・」

「なら見せるお・・・」

「」まで言われたら見たくなる。人はそういう動物である。

「なんだよ…急に、殴り足りないのか?」

ガシガシと、髪をかいた。そういうえば、最近、髪がパサついたような気がする。

いや・・・氣のせいなどではない。自分でも分かつていて。あのボスのせいなのだと。

「本当に、ぶつ殺したくなつてきたせ、・・・」

含み笑いをしながら、スクアーロは、ザンザスをどうしてしまおつか、計画を立てた。

さつきまで、重かつた足取りは次第に、よくなつつあつた・・・。

「よし・・・」だな・・・」

今ボスの部屋の扉の前に立つた。部屋の中からは物音一つしない。  
きっと寝ているか、外を眺めているのだろう。

コンコン

「カスか?」

「おう。」

「・・・入れ・・・」

## 飾られている部屋

「ほ、本当に、し…失礼するからな…！」

「ああ、すればいい」

微かに聞こえる、ザンザスの承諾を聞き、スクアーロは思に切って、ドアを開けた。

「……な？！」

勢いあまつて開いたものの、そこには、自分はみてはいけない物がたくさんあるようにスクアーロは思えた。

「どうした？…カス。お前は、見たかったんだろ？」

「ああ、そうだが…」

自分は、何と言えばいいのだらうか。自分自信の飾られているの部屋を。

「つむ…・お…・・。」

言葉を失った。

「ミミたいといひだが、何も言葉が出ない…・・・。

「どうしたカス…・・驚いて言葉も出ないか？クッ…・・まあ無理

もないな。」

ボスの部屋にはスクアーロのグッズ?が溢れていた。

「う、おおい！な・・・何のマネだあーー！」

「自分の部屋は好きにしていいだろう？」

「うつ・・・まあだけどな、その・・・何て言つんだ？な？」

自分でも何を言つているか分からなかつた。まあ無理もない。想像していた以前の問題だつたからだ。

## 飾りされている部屋（後書き）

自分自身が飾られてるってww  
こわww

めづら回（前書き）

ルツス登場！

## もう1回

「…おい、そこに突っ立つていないで、中に入ってきたらどうだ？」ギロリと見つめてくるザンザス。スクアーロは、目があい硬直してしまった。

「ふつ、驚いて動けないってのか…所詮は、カスか…」  
「む、無志津が走るんだよ！」

「は？」

「氣色悪いんだよーー！」

そう言って、スクアーロは、ザンザスの部屋から出て行った。

「……カスが」

ザンザスは、間抜けな顔をして呟いた。

「あの、クソボスがあああーー！」  
スクアーロは大声を出しながら、顔を覆い隠し廊下を走った。多分、  
今の自分  
の顔は真っ赤だろう。

そうに決まっている。

「あ、ちょっとスクーーー！」

スクアーロを呼んだのはルッスーリアだつた。

「んあ？」イライラしていたので、返答なんてしたくなかったがボス以外のやつ  
とは話してやろう、と思つた。

「さつき洗濯していたら、スクアーロのいつもの服がないのよ。」

「なつ・・・」

戦闘の時にもいつも使つあの服。あの服がないと本当に困る。

「心当たりある?」

「いや・・・思いつかねえ・・・」まさかとは思つていたが考えた  
くもなかつた。

あの部屋に行くのが・・・不気味だ。

「待て、自分の部屋を見てくる」

「分かったわ」

自分の部屋にあるわけがない。

もう一度ボスの部屋に行くのである。

もつへ一回（後書き）

スク、ファイトーー！！

次回で最終話です、だつたはず。

ボス・・・? (前書き)

最終話ですり

ボス・・・?

「あああーーーくそつーーー」

頭をガシガシとしながら言った。少し前まで、きれいだった髪も今では、ボサボサだ。

何でいもいも

俺は、こんな目にあわないといけないんだ！

足取りは、ザンザスの部屋へと少しずつ近づいていいながらも、そういうのだった。

そうした時に、スクアードは、考えた。絶対、次ははじめてやる、

この、イライラを全てサンサスにふけよ」と決心したらさつきまでの複雑な気持ちは無くなつていた。

「おい！－クソボス！－」

声を荒げ、ザンザス部屋のドアを勢いよく、開けた。

「ヴおおい！！ボス、いるかあああああ！」  
大声でボスを呼んだ。だがボスはいなかつた。

「・・・?どこ行つたんだ?」

いないわけがない。さつきも会ったはずだ。

「ボス」

突然、ベランダから出てきた。

「んあ？なんだカスか。ノックもしないで入るとはいっていい度胸してんな。」

お前の方がいい度胸してんな・・・なぜなら・・・

ボスが俺のコスプレをしていたつ

「ヴォおい・・・」

「やはりまだ髪の量が足りないかい・・・いや、なんか、うーん・・・」

「もう止めてくれ・・・ボスさんよお（泣）」

ボス・・・？（後書き）

まさかの  
W W W

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4784m/>

---

ボスの秘密

2010年10月9日01時19分発行